

北には山側の東海道として本坂街道（姫街道）が通っている。この本坂街道の名の由来は、猪鼻湖の北側から豊橋に向かう坂道の事で、豊橋は古代“穂（ほ）の国”と呼ばれ、“ほ”の坂の道から、本坂（ほのさか）街道と呼ばれるようになったという説が強い。

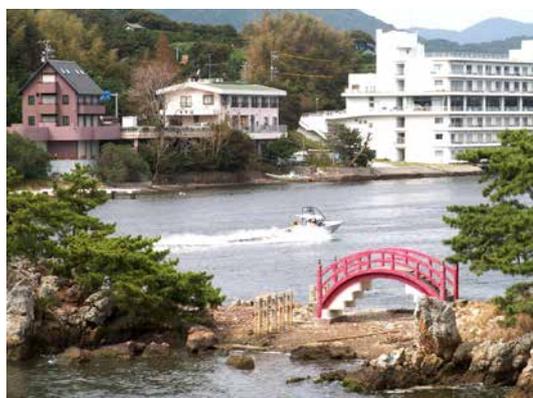
因みに“穂（ほ）の国”の“ほ”は、大和言葉で顔の頬（ほ）と同じ意味であり、浜名湖ロマンで説明している人物像の頬と同じ位置に豊橋があり、古代の人達が人物像の顔の位置を認識して“穂（ほ）の国”と名付けたと考えると理解し易いが、この符号は実に不思議である。

更に時代を遡ると“ほ”ではなく“ほお”（寶飫郡＝ほおぐん）と呼ばれていたとの事である。増々驚きである。

【不思議な猪鼻湖の名称】

この猪鼻湖の北側には古代、浜名神戸（三ヶ日）があり西には穂の国、東には井の国があった。両国共に、湖畔沿いに何らかのつながりがあったと思われる。そして遠方からは水上交通路として船により、浜名湖を南から北上し猪鼻湖を通過して浜名神戸に入り、両国とつながっていたと思われる。

その際、瀬戸は水上の関所の役目を持ち、その要の地として神社が建てられたのかもしれない。



（ボートが通る瀬戸＝猪鼻湖の水路）

それを示すかのように猪鼻湖の西岸には“乎那（おな）の峯”（尾奈の峯）と呼ばれ『万葉集』に歌われた花の名所がある。そうした事を踏まえると猪鼻湖の名称については、実にロマン漂う話である。

また、更に考えられるのは猪鼻湖神社の祭神が誰であるかという事である。猪鼻湖神社の祭神は、内浦（舘山寺）の丘陵地にある曾許乃御立（そののみたち）神社の祭神と同じ、鹿島神宮（茨城県）の武甕槌神（タケミカツチ＝建御雷神）である。

武甕槌神が中心として活躍するのは国譲り神話である。この浜名湖に

も国譲り神話の舞台となる引佐の浜があり、その地も井の国である。

従って井の国の成立時には、猪鼻湖一帯もその勢力下に組み込まれたと考えても不思議ではないと思う。

その様に考えると猪鼻湖は、井の国として穂の国と接する最西端の湖であって、“井の花湖（いのはなこ）”と呼んでいたのではないだろうか。

大胆な仮説であるが、幾重にも重なったこの地の歴史を紐解く機会になれば幸いである。

〔周辺所在地〕

〒431-1403 静岡県浜松市北区三ヶ日町大崎1899-5（瀬戸港）

〒431-1403 静岡県浜松市北区三ヶ日町大崎（猪鼻湖神社）

7

嵩山とトキワマンサク・編

古代・嵩山は神事の発祥地だったのか！

■嵩山とトキワマンサク。

浜名湖畔の西側の湖西市に、嵩山（すやま）という美しい三角形をした山がある。この山頂からも浜名湖が瞳として輝く姿が見える。この麓の地名は神座（かんざ）と言い、古代この山を崇拝した証として、中腹に神座古墳群がある。

この麓の神座には日本には三ヶ所しかないトキワマンサクの群生地があり、神座はその北限である。



（浜名湖方面から見た嵩山。中腹に神座古墳群がある）（トキワマンサク）

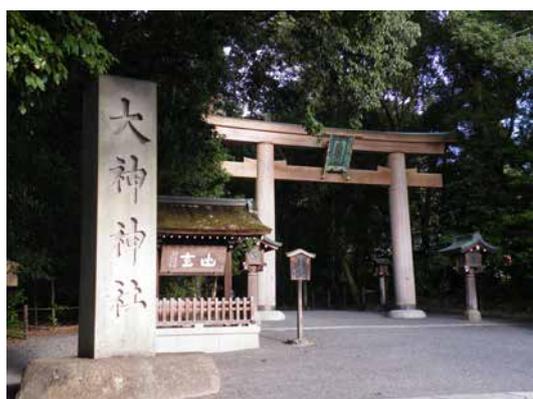
この三ヶ所というのは、神座と伊勢神宮と熊本県の小岱山であり、いずれも古代から神々の宿る場所として知られていると同時に、それぞれ海辺に近い所にある。更に奇妙な事にこの神秘的な嵩山は、日本の建国に関係した最も古い神社とされる、奈良県桜井市の大神神社と極めて似ているのに驚愕する。嵩山のある浜名湖一帯は古代にはどのような意味を持っていたのだろうか。

【大神神社との酷似】

大神神社は大阪湾から大和川を遡った奈良盆地の三輪山麓にある。周囲には卑弥呼の墓といわれる箸墓古墳や、古代の天皇陵と呼ばれている前方後円墳が多数存在する。また、伊勢神宮に祭られている天照大御神（あまてらすおおみかみ）が伊勢に移る前はこの地で祭られていた所であり、古代日本に於いて最も神聖であり、政（まつりごと）を執り行う場所であった。

この大神神社は拝殿があるものの本殿が無く、山が御神体といわれる古代の神社様式を保っている。祭神は大物主大神（おおものぬしのおおかみ＝大国主命）であり、神孫の太田田根子（おおたたねこ＝大直禰子神社祭神）を神主としている。

この大神神社と浜名湖の嵩山は極めて酷似している。いずれも古代に渡来船が来訪するような濤標（みおつくし）のある場所から、川を遡った所に御神体の山が存在する。そして、眺めた山の形状や磐座の環境も同じである。



（奈良県桜井市の大神神社）



（鳥居の奥に見える御神体・三輪山）

更に御神体である山の麓の地名は、いずれも神孫である“太田の地名”があり、湖西市では地名のほか、川の名前も太田である。また、近隣には“豊田”の地名があり、湖西市でも豊田の名の付く所は多数ある。また、豊田性を名乗る人も多く、トヨタ自動車の創業家の豊田佐吉翁もその一人である。

この古代からの不思議な同一性は何を意味するのだろうか。これは仮説であるが、古代に於いて東アジアから日本に渡来した人々が、神と崇める聖地を求め、海を渡りまた川を遡り、神の降りるのに相応しい磐座（いわくら）の地を探したのではないか。そして渡来した人々が川面から見上げた時に、円錐形をした美しい山に神が宿ると考え、それが三輪山や嵩山であったのではないだろうか。ここを神聖な場所と定め、麓は必然的に古墳群になったのかもしれない。

それを裏付けるように発掘調査では、嵩山の神座古墳群の墓様式は渡来系ではないかと言われている。

一方、嵩山（すやま）の山名であるが、同じ名前の山は中国の五岳（ごがく）の一つに、古代から神聖な山とされる嵩山（すうざん）がある。国内に於いては島根県の出雲国風土記（いずものくにふどき）に出てくる嵩山（だけさん）があり、この山も山頂に布自伎美神社（ふじきみじんじゃ）が鎮座する、古代からの神聖な山である。またもう一つ、群馬県の中之条町に古くから霊山といわれる嵩山（たけやま）があり、“道の駅霊山たけやま”として知られている。

不思議に思うのは、いずれも読み方が異なるが、神代の時代から神聖な山として人々に崇められてきた事実がある。

更に湖西市の嵩山は湖西連峰の南端にあるが、奇異に感じるのは、この場所から神石山を通り、概ね7キロ前後、北に進んだ湖西連峰の尾根にも、豊橋市の嵩山（すせ）があり、現在その麓は嵩山町（すせちょう）になっている。

もしかすると、湖西市の嵩山は、穂の国（愛知県）と井の国（静岡県）の境にある湖西連峰の嵩山（すせ）までの、概ね10キロ前後が神聖な“神山（嵩山）の領域”であったのではないだろうか。そしてトキワマンサクを有する湖西市の嵩山が、神山への入り口であったのかも知れない。この広大な“神山（嵩山）の領域”は古代の神事に於いて特別な意味を持つと同時に、日本の建国時の精神的な役割に大きく寄与したのかもしれない。浜名湖畔に広がるロマンである。

【神座のトキワマンサク】

浜名湖畔にある嵩山の麓の神座には、熊本県の小岱山と伊勢神宮と神座にしかないトキワマンサクの木がある。トキワマンサクは台湾、中国南部、インドなど南方に分布する樹木であり、トキワマンサクの花は、緑の葉の中に白紙を束ねたような花が咲き、いかにも神事に用いる紙垂

(しで)の原型のように思えてならない。(現在の紙垂は白紙であるが以前は木綿であった。)

トキワマンサクは常緑樹であり、落葉性のマンサクとは異なり、年間を通して緑の葉を保つ事ができ、この緑の葉は生命力を持つとされている。

大胆な仮説であるが、日本国内の三カ所にあるトキワマンサクは単なる群生地ではなく、日本建国時に神聖なる植物と崇め、信仰する人々が渡来して、聖地と考えられる場所に植樹をしたのではないだろうか。



(神事に用いられる紙垂)



(紙垂に似ているトキワマンサクの花)

これには似た実証例がある、古代、朝鮮半島と交流があるとされている沖ノ島の宗像三女神を崇拝する人々は、日本海側の聖なる地に“椿”を北限の秋田まで植樹していった例がある。

日本の形成時には、浜名湖や特に神座が聖なる地であり、高い文化を持った多くの渡来人が行き来したと考ええると、驚きと同時に興味が尽きない。

現在も嵩山頂上から“水面を渡り来る日の出”を見られることは、神代に思いを馳せると同時に、神聖な気持ちを得ることができる。

この神代の出来事は、今となってはトキワマンサクの木だけが、その事実を知っているのである。

〔周辺所在地〕

- | | | |
|-----------|-------------|--------------|
| 〒431-0405 | 静岡県湖西市梅田160 | (登山口＝梅田親水公園) |
| 〒431-0405 | 静岡県湖西市神座239 | (トキワマンサクの里) |

8

江尻鼻と瞳水面・編

先を見通す力が宿る浜名湖の瞳水面！

■江尻鼻と瞳水面。

浜名湖の西岸の中央南部に浜名湖全体を見通すことが出来る江尻鼻（表鷲津＝江尻鼻緑地）がある。ここからは浜名湖ロマンの瞳に当たる水面を湖畔から見る事が出来る場所である。

江尻鼻の湖岸に立つと、北側には緑豊かに広がる山々、また南側には太平洋方面に広がる水面、そして正面には村櫛半島を見ることが出来る。



（浜名湖の瞳が広がる水面）



（江尻鼻緑地公園）

現在の江尻鼻の位置より、西側に寄っていたとみられる古代のこの辺りでは、南部の太平洋側から浜名川を遡り、北部の三ヶ日（浜名神戸）や気賀の引佐の浜へ行き交う船や旅人を悠然と見ていたことだと思ふ。

旅人は更に三ヶ日からは“穂の国”へ、気賀や引佐からは“井の国”へ向かったと考えれば、浜名湖は当時の交通の要であったと思ふ。確かに対岸の村櫛は、つい最近まで陸の孤島と呼ばれるような意味合いがあったが、平安時代には既に都からの役所が村櫛の突端にあったとされる事から考えると充分理解できると思ふ。

そして現在、江尻鼻からは陸路である、今切口に架かる浜名大橋と東名高速道路の浜名湖橋、そして瀬戸に架かる新瀬戸橋の“浜名三橋”を見る事ができる。

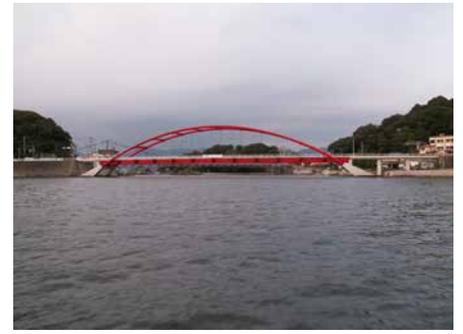
また、前に見える広い水面では時折、浜名湖で操業する多数の小型漁船の活動風景が手に取るように見る事が出来る。



(今切口の浜名大橋)



(東名高速の浜名湖橋)



(瀬戸の新瀬戸橋)

話を“瞳水面”に戻すと、江尻鼻から前方の水面を見た先は村櫛であり、そこを越えた対岸の地名は、瞳（ひとみ）の語源でもある“人見”である。

その湖畔の地は古くから“古人見”や“大人見”（ひとみ）と呼ばれ、現在でも瞳ヶ丘団地や瞳ヶ丘保育園など多数の瞳の名が使われている。今思うと古き時代に、なぜそうした名前がついたのか実に不思議である。

この雄大な水面を前にして瞳を閉じると、些細なことに気を病むことは消え、新鮮な心持になれるから不思議である。

そして深呼吸をして瞳水面の大気を体の中に一杯取り込むと、もしかすると直ぐにでも、時代の先を見通す力が宿るかもしれない。まさに浜名湖ロマンの世界である。

〔周辺所在地〕

〒431-0431 静岡県湖西市鷺津2867-5（江尻鼻＝表鷺津湖岸1号公園）

9

白須賀と浜名川・編

安らぎと運が舞い降りる白須賀の地！

■ 白須賀と浜名川。

浜名湖南部の新居町の西側に白須賀と浜名川がある。古代から浜名川は淡水湖であった浜名湖の出口として、白須賀近くを流れ太平洋に注いでいた。

明応7年（1498年）の大地震により、今切口が出現して浜名湖は直接太平洋につながり汽水湖として現在に至っている。

古代、浜名湖は海面より若干高い位置にあったが、浜名川を通じて太平洋に注いでいた為に、多くの船の出入りがあったと思われる。



（現在の浜名川・新居町駅の南）

東海地域に於ける船の活動としては、縄文時代には伊豆諸島から当時の生活道具である黒曜石が浜名湖周辺まで運ばれ、また、伊勢湾からは帆を持つ大型船の埴輪が前方後円墳から出土するなど、当時の船による広域的な水上活動を思い起こさせる。

古来、太平洋は徐福伝説を含め多くの海人（海神）が黒潮に乗り、夢ある地を探し求め、沿岸に上陸したようである。浜名湖の奥にも渡来人の生活の痕跡が色濃く残っており、その外洋からの交流点が浜名川や、白須賀の港（河口）だったのではないだろうか。

白須賀の丘陵地でも銅鐸が発見され、弥生時代には人々が暮らしてい

たことが知られており、古代この地の交流は異文化と接する機会も多く、現在想像する以上に人間味溢れた活動や、劇的な出来事があったのかもしれない。

【安らぎと運が舞い下りる白須賀の地】

白須賀は太平洋に面した海浜と丘陵とが一緒になった、比較的小さな集落であるが、昔から地震や津波が起こる度に、高低差のある海浜と丘陵とを使い分け、海と共に暮らしてきたようである。

不思議なのはこの比較的小さな地域に於いて、伊勢神宮との関係が深いとされている内宮神明神社、神明神社、神明宮という、神明の名の付く三神社がある事である。



(内宮神明神社)



(神明神社)



(神明宮)

これは海を隔てて伊勢神宮と接することが出来るだけではなく、当時、浜名湖の出入り口に於ける宗教的な重要な役割を持っていたのではないだろうか。

その証か、内宮神明神社辺りは古くから神森山と呼ばれ、神聖な領域だったようである。もしかすると三神社は元々大きな一つの神社かもしれない。

時代によって繰り返し押し寄せる地震や津波に対処する為に、内宮神明神社と神明神社は海浜地に鎮座し、神明宮は丘陵地に鎮座しているのではないだろうか。今となっては想像でしかないが、遠州灘の船からは威厳のある存在として見えたのかもしれない。

この白須賀の潮見坂の地は、太平洋を見下ろす事ができると同時に、不思議にも訪問者に安堵感をもたらす所である。戦国時代では織田信長が戦勝し尾張への帰路に徳川家康がもてなした場所であり、また街道が整備され西国から多くの人々が来るようになり、江戸への道中では、この地で初めて太平洋を見ることが出来る場所として、安堵感があったようである。そして明治天皇もこの地で休まれた事が知られている。



(おんやど白須賀)



(潮見坂展望台)



(潮見坂上の石碑群)

現在、太平洋を見渡せる潮見坂に立つと、いにしえの時代に新天地を目指し、船に乗り、力強く遠州灘を渡る人々の姿を思い浮かべることが出来る。

そしてこの場に居ると、自然と何かしらの活力や幸運が体にまつわり付くような気がする所でもある。是非、感じて見てはどうだろうか。

因みにこの白須賀は、後に天下をとる徳川家康に運が舞い降りた所でもあると思う。有名な天下分け目の戦は関ヶ原であるが、勝敗を決したのは小早川秀秋の裏切りが極めて大きいと、史実では言われている。

当時、この裏切りについて、小早川秀秋の使者が西国からこの白須賀の宿まで来て、家康と面談して確約したと言われている。当時の家康は、天下まで獲るとは考えていなかったとようで、まさに運を掴んだ地である。

【古代活躍した浜名川】

浜名川は浜名湖が淡水湖の時代には、白須賀付近で太平洋と湖を繋げる唯一の川であった。その後、長い年月を重ね今切口の出現により汽水湖になると、浜名川は形を変え衰退していった。

現在の浜名川は、浜名湖競艇場付近から湖西市の新居の町を通り、西側の白須賀に向かって伸び、大倉戸農村公園の辺りで川幅は止まっている。



(大倉戸農村公園)



(現在の浜名川・大倉戸止まり)